平成30年度 民間園長研修会
私立保育園連盟 第46回関東ブロック保育研究大会

今年度の民間園長研修会は十一月十五日～十六日、熱海後楽園ホテルにて二九九名の参加者を迎えて開催されました。今回は、全国私立保育園連盟関東ブロック保育研究大会静岡大会との共催で県外からの参加者も加わり、熱気あふれる研修会となりました。『支え合いみんなで子育て夢育て』をテーマに、喫緊の課題が量の拡充から質の向上へとシフトしつつある今、子どもの最善の利益を保証するために、実践のプロセスの質を改めて問い直す時機到来の今、この研修を通し、保育の実践と環境、それを支える人材育成と制度理解の観点で保育・教育現場に求められるものを子どもの視点に立って研究する機会となることを目的とした研修会でした。

まず、厚生労働省家庭局保育課保育指導専門官高辻千恵氏より「保育分野の現状と取り組み」について行政説明が行われました。保育の質の検討に当たっては「子ども」を中心に考えることが最も基本。保護者にとって安心・安全・健康が保障されることは大前提。いかに子どもたちが豊かな体験をしていくのか、何を目指してどんな保育をしようとしていくのかを地域や保護者に理解を得ていくことが重要。また自己評価はそこにとどまらず、次にどうつなげ改善していくかまでが含まれている事。保育所保育要録ついては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえて工夫のあるカリキュラムを検討し、保育所保育の理解、領域の考え方プロセスの大切さ、小学校での配慮が伝わるよう、様式の共通性・正合性など見極める必要があると説明されました。

基調講演は、「発達と愛着障害」というテーマで福井大学子どものこころの発達研究センターより杉山登志朗氏にご講演いただきました。近年の虐待件数は一九九〇年代より一〇倍以上なっている。今まで見つけられなかった、また、治療も受けずトラウマ処理できていない人が親世代になっていることなどが要因の一つにもなっているのではという事でした。保育現場でも愛着障害と発達障害が複雑に絡み合っているケースが見られている。愛着障害は、人との関係を作るのに時間がかかる。対応としては、日常生活を大事にする。個別対応する。自分の行動の修正が出来るようにする。とにかく子供を大事にする。〇歳～二歳の子育てにもっと人手とお金をかけるべき。と熱く語られました。

二日目には四つの分科会がありそれぞれ意義ある研修が繰り広げられ充実した二日間の研修となりました。

第一分科会

テーマ【新制度の見直しや無償化問題を考える】
参加者数六八名
講　師　保育システム研究所
代表　吉田　正幸　氏
司　会　伊豆の国市　慈恩保育園
園　長　土山　龍之
記録者　伊豆の国市　ちとせ保育園
園　長　小林弘之介

第一分科会では、【新制度の見直しや無償化問題を考える～迫りくる保育分野の二〇二〇年問題～】をテーマに内閣府・厚生労働省・文部科学省といった様々な子どもに関する検討委員の委員を務められている吉田氏より講義が行われました。

子ども子育て支援新制度を〝○号認定〟から捉えたイメージや新制度の見直しに向けた課題、二〇二〇年度からの次期市町村事業計画への対応など待機児童地域・人口減少地域といった状況が違うなか、地域の市町村の政策の重要性を説明してくださいました。

また保育の無償化に関して、無償化の意義（子育て家庭の経済的負担軽減による少子化対策・働く母親への支援）や無償化の課題（保育の量的確保や保育の質的充実）といった今後も気になる保育の無償化の動向などを説明してくださいました。

吉田氏の講義は参加者にとって、とても充実した時間になりました。

第二分科会

テーマ【保育の環境をどうつくるか】
参加者数六六名
講　師　聖隷クリストファー大学社会福祉学部
こども教育福祉学科准教授
細田　直哉　氏
司　会　富士宮市　富丘保育園
園　長　足立　和俊
記録者　三島市　恵明コスモス保育園
園　長　杉村　太地

《「保育」は、「人間」の発達を環境によって引き出し、支える専門的な営みです》と、保育環境がいかに子どもの育ちを支える重要な役割を持っているかを年齢別に具体的にご講演いただきました。能力を獲得し終えた大人の遊びとこれから能力を獲得していく子どもの遊びは違う。大人は「現実から離れる」ために遊び（＝息抜き）、子どもは「現実へ入る」ために遊ぶ（＝学び）である。「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として・・ねらいが総合的に達成されるようにすること」（認こ園要領、幼教育要領）「幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」（保育所保育指針）というように、乳幼児期の教育は、「遊び」を通して行う。そして「幼児期の教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」（認こ園要領、幼教育要領）「保育所は・・保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」（保育所保育指針）、というように保育は環境を通して行い、子どもの「能動性」と環境の「応答性」を念頭に入れ、環境構成をしてい

く重要性を学ぶことができました。

第三分科会

テーマ【一人一人が生きる組織づくり
～保育のマネジメントを考える～】
参加者数六八名

講　師　社会福祉法人相友会　諏訪保育園
園長　島本　一男　氏

司　会　富士宮市　野中保育園
副園長　中村　章啓

記録者　裾野市　さくら保育園
園　長　櫻井　利彦

一人一人とは、子ども・保育者・地域・自分を指し、すべてが生きる組織であります。組織の中で生きるために「平和的で民主的」に、お互いが育ち合う同僚性の構築が必要なことです。保育をマネジメントする必要性があるとすれば、記録を基に同僚との話し合いを通して、保育観を揺さぶり、子どもの心を理解する感性を共に磨く事のできる仕組みを考え、「子ども理解」の質を高めていく事が必要になってきます。トップやリーダー層にはその事を民主的にマネジメントする力が求められています。子どもの最善の利益を考えるには専門性の向上が求められていますが、子どもを理解する能力やコミュニケーション能力があることが大切な事です。保育士や保育所の自己評価を職員相互の話し合いを通じて明確にし、共通理解をもって取り組むことにより、さらに園の人間関係も豊かになっていくのではないでしょうか。

保育は「人が育つための社会モデルをつくる仕事」であり、一人ひとりが主体的に自分たちの資質・能力を伸ばせる仕組みを日々の業務のなかにいかに組込めるか。また、資質が向上していく組織をどう作っていけばいいのかを考えなくてはなりません。現在の保育が正しいと思いがちですが、もう一度自園の保育環境を見つめ直し、考えさせられる有意義な研修会でした。

第四分科会

テーマ【遊具の役割】
参加者数六八名

講　師　百町森取締役社長　柿田　友広　氏

司　会　御殿場市　萩原保育園
園　長　馬場ひとみ

記録者　御殿場市　神山認定こども園
園　長　本崎　泰人

現代、人気キャラクターに関連したおもちゃが子どもたちの間で、流行しています。しかし、「果たして子どもの教育に良いのだろうか」「どのようなおもちゃ遊びが今後成長に最適なのか」悩んでしまいます。

第四分科会では、柿田先生に「子どもは、遊びながら成長する」というコンセプトをもとに保育・教育の中の「遊具」の役割について講演していただきました。

具体的に、乳児は、「運動」「手先の器用さ」「五感」を身につける遊具。幼児には、「ごっこ遊び」「構成遊び」「ルール遊び」「表現遊び」などに必要な遊具の紹介を受け遊具の用い方をレクチャーして頂きました。

子どもにとって遊具とは、環境を通して行われる教育の必需品であり、乳幼児が主体性や自主性を育て、正常な成長・発達を遂げるためには欠かせないものだと学びました。